

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：32689
研究種目：奨励研究
研究期間：2019
課題番号：19H00007
研究課題名：ハワイにおける非母語話者の言語意識

研究代表者

大澤 廉 (OSAWA, Ren)
早稲田大学高等学院・教諭

交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：350,000 円

研究成果の概要：

本研究の目的は「日本人英語に多く接するハワイでは、その変種に対して英語非母語話者からの評価も高くなるか」であるが、日本英語訛りの女性話者が社会的地位で最も高く、フィリピン英語訛りの女性話者が最も魅力があるという結果であった。また、男性より女性の方が高く評価させるということも分かった。

ホノルル市における第二言語学習者（多くはアジア系移民）にとって、英語を外国語としている英語(Expanding Circle of English)、つまり日本人訛りの英語が、第二言語として機能している英語(Outer Circle of English)、フィリピン英語にかなりかなり近い評価となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語のアクセントは「スタンダード英語」に近ければ近いほど、より高く評価されてきたが、外国人訛りの英語であればあるほど低く評価されてきた。本研究では日本人訛りの英語が、第二言語として英語を使っているフィリピン英語とかなり近い評価がされた。これが意味しているのは、被験者が日本人訛りの英語を、ハワイにおいてしっかりと機能しているのを見聞きし、日本人英語に否定的感情を持っていないかもしれない、ということである。これは、社会的にも教育的にも非常に意義のある発見であると言える。日本の中等教育において、訛りのある英語変種に対してより肯定的な態度を育むべきではないか、と思われる。

研究分野：社会言語学

キーワード：世界英語 アジア英語 英語変種 言語意識 話者評価法 多民族社会

1. 研究の目的

(1)本研究の目的は「日本人英語に多く接するハワイでは、その変種に対して英語非母語話者(NNSs)からの評価も高くなるか」であるが、より大きな目的は、「アジア訛の英語に対して、日本の英語教育がどのように対処すべきか、を一考すること」である。先行研究において、日本の英語教育はアジア英語変種に対して、積極的な態度を持つことが重要であると、多くの研究者が指摘している。ハワイ州は、移民が多く、そのうち日系移民が最も多い。

NNSs による NNSs への言語意識の研究は、あまりなく、これがハワイにおいて NNSs によるアジア変種英語への評価論文は初めてのものとなる。日本人英語への評価は一般的に否定的なものであるが、日系が多く住むハワイの多民族社会において、NNSs がどのような言語意識を持つのか、興味を持ち、調査することとなった。

2. 研究成果

(1)話者評価法によって、非母語話者の英語を6ポイントで評価してもらった。実験参加者はハワイに在住する非母語話者で、主にアジア系移民である。年齢は様々であるが、20代前半から

60代後半まで、実験参加者はアンケートに全て答えた有効回答とし、人数は40人である。

因子分析された2つの項目「優位性」「魅力」を「アクセント」と「性別」を独立変数として設定し、二元配置の分散分析で統計処理した。

まず話者の「アクセント」と「性別」の交互作用に関して述べる。「優位性」「魅力」に対するそれぞれの交互作用に関しては、有意ではなかった。「優位性」は、 $F(1,216)=3.87, p<ns$ 、「魅力」は、 $F(1,216)=1.02, p<ns$ であった。

また下位尺度に関しても統計処理した。「アクセント」に関しては、「優位性」は、 $F(1,216)=4.43, p<.05$ で、「魅力」は $F(1,216)=11.14, p<.01$ で、有意な結果が得られた。

「性別」の因子に関しては、「優位性」は、 $F(1,216)=1.48, p<ns$ で有意ではなかったが、「魅力」は $F(1,216)=3.96, p<.05$ で、有意な結果が得られた。

言い換えるなら、「アクセント」が、「優位性」と「魅力」に対して、評価に対して影響力があり、「性別」、つまり話し手が男性か女性かであるかについては、「優位性」に対しては統計的に影響があったとは言えないが、「魅力」というものに対しては影響がそれなりにあった、と解釈できる。また、アクセントと性別が合わさって、それぞれの質問項目に影響は与えなかった。

(2) 「優位性」「魅力」に関する結果

「日本語訛り英語」と「フィリピン訛り英語」をそれぞれの質問項目の評価の平均点の結果は図1のようになった。

| 優位性 | 順位 | 平均値 | 標準偏差 |
|---------|----|------|------|
| フィリピン男性 | 3 | 3.81 | 1.27 |
| フィリピン女性 | 2 | 3.86 | 1.16 |
| 日本人男性 | 4 | 3.46 | 0.92 |
| 日本人女性 | 1 | 4.01 | 1.18 |

| 魅力 | 順位 | 平均値 | 標準偏差 |
|---------|----|------|------|
| フィリピン男性 | 2 | 3.84 | 1.15 |
| フィリピン女性 | 1 | 4.28 | 0.94 |
| 日本人男性 | 4 | 3.56 | 1.19 |
| 日本人女性 | 3 | 3.71 | 1.15 |

図1：優位性、魅力に関する評価の平均値とランキング

「優位性」、つまり社会的に上の階層にいるか、そうでないか、に関しては、日本人女性の発音が最も高く評価され、順にフィリピン女性、フィリピン男性、そして日本人男性という結果になった。女性が男性より高く評価されることは多くあるが、今回の統計データでは、優位性に関しては統計上有意ではないことから、断言することはできない。この結果は評価者が女性がやや多かったということも影響しているかもしれない。日本人男性が他の3人に対してやや低く評価されているのは、やや訛りが強めに出ているからかもしれない。

「魅力」、どれだけその話し手が興味深い人物であるか、に関しては、フィリピン女性が最も高く、順にフィリピン男性、日本人女性、日本人男性という結果になった。日本人男女はあまり差がない。フィリピン女性が突出して高いのは、ハワイで働く多くのフィリピン女性が看護師やメイドといった人を相手にしたりする接客業に従事していることから、接触の度合いが多いため、と言えるかもしれない。

社会的階層に関する評価で、日本人女性が最も高く評価されたのは、日系アメリカ人の女性が医師、弁護士、不動産セールスなどプロフェッショナルな仕事に従事しているためと考えられるが、日本人男性が最も低く評価されたことは対象的である。訛りの強い英語を話す日系人や日本人は社会的に下層の職業についているという実態に沿うものかもしれない。

(3) 通常の言語意識に関する研究は、英語を母語とする話者(NSs)と母語としない話者(NNSs)の評価を比較することがほとんどであり、NSsが常に高く、NNSsが低く評価されてきた。NNSsでも第二言語として英語を使っているインドやフィリピンと、外国語として英語を使っている中国、韓国や日本の英語は、第二言語として英語を使っている英語の方が高めに評価されるが、本研究ではやや違った結果が得られた。

日本語訛りの英語が、社会的優位性の項目でフィリピン英語より高く評価された。ハワイ州と

いうアメリカ合衆国本土から見て社会環境的にはやや特殊な社会環境下においては、日本人訛りの英語はそれほど珍しい英語ではなく、社会的な役割を果たしている言語となっている証明なのかもしれない。

教育的意義としては、いままでは矯正の対象でもあった訛りのある日本人英語でもそれほど否定的な対象として見るべきではないということである。訛りの度合いが強いものは、やや否定的な感情を産むかもしれないが、それほど嫌悪の対象とすべきではなく、様々な英語の変種に対して積極的な態度を持つべきである (Kachru, 2005)。Jenkins (2000) が主張するような *Lingua Franca* としての英語を推奨していくならば、この否定的な態度は差別を産んでいると言っても言い過ぎではない。

参考文献

Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language: new models, new norms, new goals*. Oxford: Oxford University Press.

Kachru, B.B. (2005). *Asian Englishes: beyond the canon*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

3. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

大澤 廉 Language Attitudes Towards Non-native Englishes in Hawaii 早稲田大学高等学院研究年誌 70 号、2020

〔学会発表〕 (計 0 件)

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

4. 研究組織

研究協力者

研究協力者氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。